

『前太平記』はなぜ老武者を描くのか： 老いを利用した歴史叙述の方法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学文学部日本文学研究所 公開日: 2025-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 奥田, 粹ノ介 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000665

『前太平記』はなぜ老武者を描くのか

——老いを利用した歴史叙述の方法——

奥田粹ノ介

一、はじめに

『前太平記』は、近世期には浄瑠璃本や読本、合巻など様々にかたちを変えながら受容された人気の作品であるが、作品自体に対する個別の研究はあまりにも少ない。初刷とみられる四十一巻から成る無刊記の版本が叢書江戸文庫に翻刻されたことで研究の土台が整えられたにもかかわらず、それ以降の研究の場ではほとんど注目されてこなかったと言つて良い。

『前太平記』の内容に関する分析は、叢書江戸文庫の解題がほぼ唯一のものであるといつて良く、今なお重要な指標である(1)。板垣俊一はそこで、『前太平記』の「全体を貫くモチーフは、源家の武将達が如何にして王権の危機を救うのかを語ること」であり、それを根底で支えるのは、「仏法王法相比する」という「極めて中世的な論理」であると指摘した。朝廷とそれを支える源家の武将は「仏法」あるいは「王法」を担い、それに敵対する者は、怪異のみならず反逆者も悉く「外法」を担う。中央の「仏法」「王法」が「外法」を破り天下静謐するという構造を繰り返すことが『前太平記』の歴史叙述の特徴というこ

とになる。一方で、「仏法」や「王法」を担う支配者側が必ず正当化され、「外法」に属する者が全て悪人として描かれるわけではないことも、すでに板垣によつて指摘されている。『前太平記』に登場する武士は官軍・賊軍を問わず、「忠義・智謀・武勇の兼美」を理想として評価されるため、必ずしも善と悪の二項対立的構造に囚われていないという。

かかる分析を前提として踏まえつつ、本稿は『前太平記』に登場する複数の老武者に着目して、『前太平記』の歴史叙述の特徴を探る。『前太平記』に見える「老武者」は、いずれも老練な武士という意味ではなく、歳老いた武者の意味で用いられている。「老武者」や「老い」という表現で説明される武士は、『前太平記』上下四十巻の中で十人見られ、いずれも固有名を持つており登場する章段の中で大きくとりあげられている。軍記物語に老武者が現れること自体は珍しくないが、一つの作にこれほど多く登場し、さらに焦点を当てた記述を行うことは、それ自体が十分特徴といえる。次節以降は、『前太平記』はなぜ老武者を描くのか、彼らは如何様に描かれ、どのような役割

を担っているのかという点を検討したい。

二、『前太平記』が創作する無名の老武者たち

『前太平記』のうち、最初に老武者が登場するのは、承久・天慶の乱を描く巻五「下野国宇都宮合戦事」である。頃は天慶三（九四〇）年二月二日と設定され、将門の弟である御厨三郎将頼・大葦原四郎将平らの軍が宇都宮を攻めて藤原秀郷・平貞盛と交戦する。その合戦で最初にとりあげられるのが、老武者同士の戦鬪である。

戦が始まって二日目、秀郷の陣より「其身人数ならねば、名乗り申す共よ知る人有るまじ。是は陸奥の住人、津川平六貞包。年積もつて五十七」と名乗る武者が駆け出る。山野に生まれて若年の頃より鳥獣の殺生を好み、後世の罪を免れないことに悩んでいたところ、「幸い此乱出で来て、官軍の数に加はり、朝家の為に命を失はん」機会を得たのだという。その名乗りを受け、将平の勢より安房国の東条次郎兵衛入道道玄なる兵が進み出る。彼もまた、「齢六十に余つて、愚息二人有しを、去年藤川合戦の時、二人共に討死せり。されば我甲斐なき命生き残つて、若きを先立て、恩類の悲涙老眼に余れり」という老武者である（2）。「其後度々の軍に討ち死にせんと狂へども、老武者なりと侮つて、合はぬ敵と思ひ、皆人我が相手に立たず」いたという。互いにとって格好の相手であると、両者は時が移るまで戦うものの勝負がつかない。両者はもとより戦場での死を望む故に勝負を決する必要はなく、「打ち勝つたればとて、老

命已に限り有り。後栄期すべきに非ず」と示し合わせ、刀を刺し交わしたという話である。その直後には対照的な若武者の描写が挿入される。将頼の陣より十五、六歳ばかりの若武者が三十騎余り駆け出で、貞盛方からも同年齢の若武者二十騎余りが待ち構える。そこからは秀郷の子息千時・千晴の活躍に焦点が当たり、将平・将頼に勝利することでこの戦は結ばれる。

これと類似する構成を持つ話が、巻二十五「武州川越合戦事」にも見られる。これは頼信・頼義が平忠常の追討を命じられ、下総へ出発した直後の章段であり、頃は長元三（一〇三〇）年とされている。十月二十日の開戦より熾烈を極め、「皆今度の軍に手柄を顕し家を興さんと、義を専らとし心を励まし、縦骸は戦場の塵に埋むとも、一足も逃げたりと天下の人口に懸けらるなど、父は子を制し、郎従は主を諫めて、手負ひ死人を乗り越へく戦へば、何れ隙ありとも見へず、一挙に死をぞ争ひける」という有様であった。

そのような中、大弥治定という老武者が頼信の陣より現れる。年齢は六十歳ほどで、横縫が千切れた鎧を着て馬鞍も古く、「平家の陣には、其出立の余りに見苦しさに、目引き私語き笑ひし」という有様であった。彼は、自ら「其身人数ならねば、其身を知る人よもあるまじ」と述べるように、作中においても無名の人物である。祖父の定幹は天慶の乱の際筑紫で討死し、当時幼かった父が所領を横領されたために、自らも長年信濃の山里にて貧しく暮らしていたといい、「一人の愚息を世に在らせんと思ふ故、馬物の具の見苦しきを厭はず、人の嘲りをも顧みず」

戦場に望んだのだと語る。その名乗りを聞いて平家方より大井太郎通教が駆け出ようとするが、同姓の平太茂教は「あれ程まで年老ひて、此軍場に莅まずとも、討ち死にと究めずとも、早死人の数に入りたる身を以て、嗚呼がましく、陣頭に出で、名乗ればとて、其者に逢はんとは老げなし。無益なり」と抑える。治定は嘲笑され、戦う必要すらない存在とされているのである。治定は大いに腹を立て、二寸ばかりの雁股を放つて茂教を討つ。通教はたまりかねて治定と組み合うが、「治定心は矢長に早れども、老武者の悲しさは、念なふ首を捕られ」る。

続いて治定が述べていた「一人の愚息」である小弥太定時が登場する。生年十八歳の屈強な若武者で、父が討たれたと聞いて頼信の陣より駆け出で、通教と組んでこれを討つ。定時は「唯今父を此にて討たせ、一足も去らず、当の敵を討ち取りたる剛の者、松原小弥太定時。生年十八歳。父の敵は斯くこそ振る舞ふものなれ」と高らかに名乗り、通教の首を右手に、父治定の首を左手に掲げながら帰陣したという。この後は、頼信の三男頼季と、忠常の子忠将という主要人物の戦いの記述へと繋がっていく。

この話を単独で見れば、先に引用した巻冒頭における、戦に臨む兵の気概を示す一文の具体例と位置付けることができる。治定は生まれながらに貧苦であり、取り立てられる機会を得ないまま年老いたが、嘲られながらも「一足も逃げ」ることなく戦い敵を討つ。また、「骸は戦場の塵に埋む」こととなったが、子が功名を立てたことによって、「家を興」すことに繋がった

ということである。しかし、先に掲げた「下野国宇都宮合戦事」と合わせて読むことにより、別の視点が浮かび上がる。

先に掲げた「下野国宇都宮合戦事」と、描写が一致する点を整理すると、以下のようなことになる。

①これらの合戦の展開および描写は他の資料や文芸作品にはみられないということ。

②ここに登場する老武者、およびその周辺人物は他の資料には見られない、『前太平記』が創作した人物であるということ。

③この戦で名前が見られるのは、源平の主要人物を除けば老武者と周辺人物のみであるということ。

④その話は合戦描写の最初にとりあげられ、およそ戦局にはかわりないものであるということ。

⑤二人の老武者の戦う動機は大義や政争とはかわからない、これまでの人生に由来する個人的なものであること。

まず注意すべきは①で、そもそも、ここに挙げた二つの合戦自体が、殆ど『前太平記』の創作であるということである。承久・天慶の乱で将頼・将平と秀郷・貞盛が交戦したことは『将門記』や『今昔物語集』には見えず、『将門純友東西軍記』には将頼・将平の名前自体は見られるものの、構成・描写共に『前太平記』との共通点は全くないと言って良い。

そして、頼信による忠常の追討に関しては、他の資料では戦い自体が起こっておらず、「武州川越合戦事」自体が架空である。例として『宇治拾遺物語』巻第十一「河内守頼信、平忠恒を攻むる事」を見ると(3)、忠常は湖の奥に屋敷を構え、渡

し船を隠して容易に攻め入れないようにしていた。そこへ頼信が到着すると、「我が家の伝へにて、聞き置きたる事」として、「この海中には、堤のやうにて広さ一丈ばかりして、すぐに渡りたる道あるなり。深さは馬の太腹に立つと聞く。この程にこそその道は当りたるらめ」と看破する。忠常は「浅道をば我ばかりこそ知りたれ。すぐにはえ渡り給はじ。浜をまはり給はん間には、とかくもし、逃げもしてん。え攻め給はじ」と甘く見積もって構えていたため、頼信の兵が渡つて来るとすぐさま諦めて降伏する。弱点となる道を知っている者は多くの兵の中でもわずか三人ほどであり、皆「げに人にすぐれたる兵の道かな」、「殊にすぐれて、いみじき人におはします」と、畏怖の念を抱いたという。この話は、『今昔物語集』の巻第二十五「源頼信朝臣責平忠恒語」や『多田五代記』にも同筋でとりあげられるが、ここで賞賛されているのは、坂東の慣れない地での確に兵を進め、勢のある者を戦わずして下した頼信ひいては源家の知識と智謀、判断力である。すなわち、これらの話が描こうとするものは、実際に戦いが起こっては成立しないものであり、激戦の末に忠常を合戦で下したという筋の『前太平記』は、これらとは全く異なる意識を持つているということになる。

ではあえて合戦を創作し、そこで老武者に焦点を当てたのはなぜか。②③に掲げたように、この合戦で大きくとりあげられているのは、主要人物を除けば全て架空の人物であり、加えて④のように、彼らの戦いは、およそ合戦の勝敗には影響を与えないものである。軍記物語が特定個人の戦ぶりに焦点を当て

るのは、およそ戦の勝敗を分ける重要な要素として示すことや、著名な武士個人への関心から武勇を描くこと、あるいは鎮魂などが目的として想定できるが、これは明らかにその類ではなく、また娯楽的な側面で合戦を描こうとするならば、活気のある若武者の爽快な活躍を創作すれば良い。

つまり、ここで架空の老武者をとりあげる必然性は、⑤にあると考えられる。ここに登場する老武者の自白は、政治的動乱の一環としてかかる合戦が起こり、それが治められるという大局的な流れがある一方で、たとえ合戦が終わり時代が移つても、個人の人生においては後悔や遺恨が残り、次の戦はそれを解消するための場になることを示している。言うなれば、一つの事件が起こり、解決されるまでを描く大きな視点と、各事件を横断する小さい私的な視点が混在しているのである。もしこの老武者たちが著名な人物であれば、私的な動機は結局、源平という家や官職といった組織など、より大きな概念に内包されてしまふ。朝廷や大将の思惑をかけ離れた無名の老武者を創作したことには、歴史的事件を抽象化せずに、多面的に描こうとする意図が読み取られ、合戦はそれを描くための舞台であると位置付けられる。

そして、その個人の人生を語る存在が老武者であることによって、それぞれの事件は結び付けられ、大きな歴史的循環構造を成すことができる。渡瀬茂は、『前太平記』が『太平記』から継承した特徴として、「年紀の記載」を挙げている(4)。出来事の年月日を記載することで、漢文的な編年の歴史叙述の

方法を受け継いだ『太平記』の文体を再現したという指摘である。加えて、「去程に」「爰に」「其後」などの接続語句も『太平記』的な時間の形式で書かれているのだという保証」になる」とも述べている。渡瀬の指摘は形式の模倣という点に留まってはいるものの、『前太平記』にかかる時間への言及が多いという特徴は重要である。ここに掲げた老武者には具体的な合戦に言及する者もあり、将平の兵である道玄は「去年藤川合戦の時」に子を失ったことを、大弥治定は天慶の乱で祖父が討死したことを動機としている。定治が老武者として登場する「武州川越合戦事」以前の合戦は、巻十九における将門の遺児平良門の蜂起まで遡り、これは頼信が元服したばかりの永延三（九八九）年のことなので、作中時間でおよそ四十年間、頼光の没後に至るまで定治は名を揚げる機会に恵まれなかったということになり辻褄も合う。年月や事件の先後を示す接続詞が用いられていることは、見方を変えれば、各事件を時系列で整理して一つの線で結びつけるような時間認識を持っていたことを示しており、老武者の記述における「年積もつて五十七」、「齢既に六十に余つて」「年の程六十計りなるが」という年齢に関する記述も、それだけの時間の経過があることを示す記号であると位置付けられる。

三、合戦にかかわる老武者の思惑

先の例以外の老武者にも、同様の役割があると指摘できる。巻十一には、捕らえられた藤原純友が獄中で死して、源氏の恩

賞配分が行われた後に「定阿入道被虜事」という章段が設けられている。題にもなっている栗山将監入道定阿は他の資料には見られず、本作が創作した人物と考えられ、純友の末子重太丸の母方の祖父であるという。重太丸は十三歳ながら父純友に従って戦に加わり、共に捕らえられた父が獄中で亡くなつて後、六条河原で誅される。

定阿入道は六十七歳の老武者で、純友が伊予国を出奔した折、娘（重太丸母）と共に同国を發つて土佐国の松尾坂へ移り隠れ住んでいた。しかし重太丸の計報を聞いた娘が物狂いとなつて亡くなったことで、定阿は「孫子の教養のため」に兵を挙げることを決意する。定阿は譜代の兵と共に、純友父子の敵である橘遠保を囲み「我一人、年老ひたればとて、弓矢の家に生まれながら、定業の來たるべきを待つて、病の牀に死なん事の無念さに、遠保が城を枕として、孫子の教養ともし、又は老後の思ひ出にせん」と意気込むが、ついに主従七騎となり遠保軍の将である葛野成忠と戦う。結局、定阿は「老武者なれば、心は矢長に思へども、忽ち腕緩く成りて」生け捕られる。「誠に入道志の程は勇なれ共、身の老ひたるを打ち忘れ、謂はれ無き腕達にて、万人の嘲弄を老後の縄目に及ぼしける、其身の果てこそ浅猿けれ」という評とともに事件は収束し、この章段は締め括られる。

先の老武者とは異なり、定阿は一介の兵ではなく純友の身内かつ戦の首謀者ではあるものの、その目的は孫子の供養という私的な感情を逸脱していない。それがこの話の重要な部分で、

官軍である遠保に兵を向けていることから、定阿は朝敵と位置付けられても良いはずであるが、この戦は天下に仇なす行爲として非難されておらず、定阿の境遇と心情は「一門悉く滅び、剩へ重太が母さへ死して、身親しき者は一人もなく、深山に残る朽木葉の、一夜の嵐を待つが如く、怙みなき老の命」といったかたちで、同情に足る哀れなものとして描写されている。つまり、この話で重視されているのは朝敵とされた純友の身内という立場ではなく、重太丸の祖父という立場であり、さらに言えば定阿という個人ではなく老武者という造形そのものであると考えられる。『前太平記』は純友の乱という著名な事件の背景に、自身は戦場で命を失うことなく生きながらえながら孫子に先立たれて孤独の身となり、仇討ちに挑むも本意達せられず不名誉を世間に晒した哀れな老武者が存在したことを語る。つまりここにも、一つの事件が起こり天下静謐されるまでの流れを描く大きな視点と、それを仇討ちに挑む老武者の私的な闘争と捉える小さな視点が存在しているのである。

また、右のような『前太平記』が創作した人物以外で、老武者として登場する者に藤原千晴がいる。藤原秀郷の子として『尊卑分脈』などの資料にも名前の見られる人物で、『前太平記』においては田原相模介藤原千晴と称され、先の「下野国宇都宮合戦事」に秀郷軍として戦う描写がある。

千晴はいわゆる安和の変で失脚した一人として知られる。安和の変については、源満仲と藤原義時が謀反を密告したことで西宮左大臣こと源高明が左遷されたことがよく知られる一方

で、事件の詳細や中心人物、高明がどこまで関与していたかなどを確実に記す資料はないが、『前太平記』巻十三は、高明が為平親王を擁立して兵を起こす顛末を明確に描いている。その中で、千晴は天慶の乱において「粉骨を尽くせしか共、さまで忠賞せられざりければ、代を恨みて居た」ことを動機として謀反に加担したといい、高明の企てに最初に加担して満仲を取り込むことを提案するなど、事件の中心人物として位置している。巻十四「相模介千晴被虜事」にて、企てが露見した千晴は満仲の舍弟である武蔵掾源満季の軍勢に攻められて戦う。千晴は「今年六十に成りける老武者なれば、腕緩く眼疎く、打ち太刀さだかならざりければ」、難なく生け捕られる。

この章段で注目すべきは、千晴が戦に及ぶ前に、郎党の一人である梁田八郎に話した事件の動機である。千晴は「抑今度御謀叛を勧め申せし事、朝家を傾け奉らんと志に非ず」といい、また「我が家を起すべき為のみならず」という。そして戦に臨む目的は、天慶の乱において平貞盛が「己れが功を高うせん」として、千晴が忠を猜みて上聞を掠むる」ことを恨み、貞盛一門を滅ぼすためであると語るのである。

千晴が安和の変の首謀者であることも、その動機も『前太平記』の創作と考えられるが、その中で、彼自身は定阿と同様に野心を持たず、あくまでも個人的な恨みを動機に行動する人物であることが明確に描写されている。つまり、『前太平記』は内容のみを見れば明らかに朝廷を脅かしている事件であっても、定阿対遠保、千晴対貞盛という私的な因縁による闘争とし

て内実を意図的に矮小化しており、その発端を定阿であれば純友の乱、千晴であれば天慶の乱と、過去の事件に結びつけているのである。要素に分解すればこれらの老武者の話の本質は、「藤川合戦」を背景とした東条道玄と津川平六の対決、天慶の乱を背景とした大弥治定と大井らの対決となら変わらないと言つて良い。老齢まで生きたことによる後悔や恨みが引き起こす対決と、「仏法」「王法」と「外法」の対決という大小の視点が組み合わさることによって、立体的な歴史叙述が生まれているといえよう。

四、作品の後半で頻出する老武者たち

卷三十四が描くのは、前九年の役から二十年余りが経った永保三（一〇八三）年以前の頃で、穏やかな時代である。前九年の役で武功を挙げた清原武則は鎮守府の將軍に任じられ、今は孫である真衡が奥六郡を受け継いで治めていた。その真衡の養子である成衡の婚姻に伴い、出羽国の吉彦秀武が饗応に参じる。秀武は「去んぬる康平の合戦にも、三陣の陣頭と成り、数度の高名して威を振るひしが、今は年も老ひて、而も真衡が威徳父祖に優れ、一家の輩悉く従者の行跡を成し」ていた。秀武は雨の中、真衡のために金を高く積んだ盤を頭上に掲げて待つていたが、真衡は碁に興じていたため現れなかった。秀武は「主従の如き挙動を成すと雖も、我正しく一家なり。而も年老ひたり。髪を握り哺を吐くは古の道なり。真衡誠に道を知らば、疾く出で、逢ふべきに、斯くまで腰膝を屈め、身を苦しめて庭上に跪

きたるを、久しく見入れざることの情け無さよ」と大いに怒り、金を庭に投げ散らして本国へ帰る。

この話は、後三年の役が発端となった事件として『後三年記』に同筋・類似の表現で見え、秀武はどちらにおいても白髪頭の老武者として造形されている。『前太平記』が『後三年記』を典拠の一つとして利用していたことは既に板垣の解題が指摘しており、また本文の上でも明らかであるが、右の引用部に対応する記述は、「秀武は三陣の頭にさだめたりし人なり。しかるを真衡が威徳、父祖にすぐれて、一家のともがら、おほく従者となれり」、「われまさしき一家の者なり。果報の勝劣によりて主従のふるまひをす。さらむからに、老の身をかゝめて庭にひざまづきたるを久しく見入れぬ、なさけなく、やすからぬことなり」というものである（5）。最初の引用部で傍線を引いて示した「今は年も老ひて」という表現は『後三年記』にはなく、次の引用部での老いに関する記述は前後の表現を大きく変え、握髪吐哺、すなわち優秀な人材を迎える道を知らないという真衡への非難を加えている。『後三年記』において「老の身をかゝめ」ることは、身体的な苦痛を強調する表現で秀武の不憫を示すものであるが、『前太平記』の場合、「而も年老ひたり」という表現は前後の文、そして「数度の高名して威を振るひしが、今は年も老ひて」の一文と結びつき、康平の合戦で活躍した勇士であるという秀武の自意識を強調している。『前太平記』の方が老いに関する関心が高いことは明らかで、加えてその表現は康平の合戦から経過した時間の長さを示すものとしてより効

果的に機能しているといえる。また、これまでの老武者の描写を踏まえると、大きな事件の原因を、個人の人生に結びつける『前太平記』の記述の傾向も窺えよう。

続く卷三十五には「將軍出陣并大宅光任事」という章段がある。謀反を起こした清原武衡・家衡討伐のため、八幡太郎義家出陣の折、軍を見送るのが大宅光任である。光任は源氏譜代の郎党というが『前太平記』ではここが初出である。年齢は八十歳であり、先立つた源氏の武士たちを「賢ふぞ身罷りて、光任が如き恥に会はず」と羨み、老いの身を嘆く人物である。光任は「一人国府に棄てられて、片時も生きて有られんや。命は悲しき者なりき。一足なりとも御供せん」と意気込むが、彼は杖と従者に支えられてもはや出陣叶わぬ姿である。光任は「年の若き時、忠を尽くし名を現し給へ。老ひは悲しき者ぞかし」と、出陣する兵に激励を送り、兵は皆「誠に、麒麟も老ひぬれば驚馬に劣るとかや。哀れ世の昔ならば、此人こそ一方を承り、勇々敷く挙動ひ給はん者を」と涙を流したという。

ここで対照されているのは、戦場で命を捨てることも叶わず、遂に参戦することもできなくなった光任の老いと、これから合戦に臨む現役の兵の若さである。「麒麟も老ひぬれば驚馬に劣る」は、『戦国策』「蘇子説齊閔王曰」に見られる「麒麟の衰ふるや、驚馬、之に先だち、孟賁の倦るるや、女子、之に勝つ」に由来し(6)、『平家物語』卷五「咸陽宮」や謡曲〈景清〉にも取られる表現である。優れた人物も年老いれば働きや能力が普通の人にならばぬことの喩えて、まさに『前太平記』の老

いに対する意識を端的に示した表現といえる。

『前太平記』を含めて、軍記物語は武士の老いについて、しばしば身体の衰えのみならず、老齢になるまで生き残ることそれ自体を否定的に捉える。老武者として最も著名なのは、謡曲にも採られた『平家物語』卷七の実盛であろう。篠原での合戦の際の実盛は六十余歳で、木曾方の手塚太郎と組み合って討たれる。彼は「敵も老武者とて、あなづらむ事も口惜しかるべし」と白髪を黒く染めており(7)、討った首を洗うと白髪に戻ったという。実盛の行為は戦場で命を落とす覚悟の表れであるが、本来であれば白髪の老武者は敵に侮られ、交戦することもままならないことがわかる。また、『平治物語』上「待賢門の軍の事」にて、兵頭内が「老武者なれば乱れ合ひたる戦ひ適はで」と評され、子の戦いぶりを見ながら「若い時ならば、走り出で、共に戦ひなん」と思いつつ、「老い期なれば、適はず、力及ばで」、子が討死する中宿所へ帰るという話も、老いがもたらす醜態を示す例である(8)。力の衰えた老武者は勲功と見做されず、戦場では相手にすらされない。若いうちに戦場で命を落とさなかったこと自体が武士にとって恥であると同見做され、先に見た道玄が老武者と侮られ、治定を見た平太が呼びかけに応じなかったことも、こうした考え方に基づくものであるといえる。ここで光任が兵に送る言葉も、本質は激励や戒めではなく若さへの嫉妬と羨望であり、それを受ける兵も言葉を送ることしかできない「驚馬に劣る」老人であると憐れみ、譜代の郎党として敬意を表していないのである。

卷三十九は義家の没後、源氏棟梁を継いだ義忠の暗殺事件と源家の不和をとりあげる。義忠暗殺の嫌疑をかけられた義綱は甲賀山に籠り、為義が追討する。その戦を描く「甲賀山軍事」にて、義綱の軍より六十余歳の武士が名乗りを上げる。彼は田代清次師久という奥州の者で、前九年の役より四十年源家に仕えていたが、「老武者の悲しさは、未だ然るべき敵に逢ひ進らせず」という。寄せ手の陣に奥羽二州の者がいるならば「同国の好に、駆け合はせて雌雄を決し給へ」と呼びかけると、出羽国松根弥太郎が応じる。幼い頃に会ったことがあるものの、以降は同じ源家にありながら参会の機会に恵まれなかったといひ、「今日不思議の対面」と戦う。弥太郎が勝利して師久の首を落とすと、十六、七歳になる師久の子、清六師宗が父の仇を討つために馳せ来る。弥太郎は昨秋病で亡くなった自分の子と重ね、「今、父の為に討ち死にせず共、疾く本陣に帰り、重ねて君の為に死すべきなり」と嗜めるが、師宗は受け入れない。弥太郎はこれを討ち、田代親子の首を一太刀に貫いて帰陣したという。両軍の勢は「一足も引かず討ち死し、名を戦場に留めける」師宗を称えたという。個人の思惑で戦場に立つ老武者という点はこれまでに確認した例と通じるが、それに加えて、それまでの事件と異なり源家の同族内対立である故に、戦場に立つ老武者と、それを知る同国の武士の対決という新たな構図が生まれている。また、小冠者師宗への賞賛は討死の機会を得なかったこれまでの老武者と対照されるものである。

卷四十はこの戦いの続きで、義綱の子である義弘は戦況の不

利を見て、「快く最後の一軍して、武勇を後代に伝へん」と思うが、当の義綱は剃髪し、「恥を忘れて敵に降り、一先づ罪を謝し勅勘を免れ」ようとする。義弘は「誠に猛将義士と謂も、年老ひぬれば智勇も失せ果て候ひけるぞや」と呆れ、「老命を惜しみ」と誇りを受けるも恥であると自害を勧める。ここまで諫められて尚も決断できずにいる義綱を見て、義弘は自害する。義弘の言葉は、先の「麒麟も老ひぬれば驚馬に劣る」に通じ、義綱の判断は、「名を戦場に留め」た若き師宗と対照的でもある。続く卷四十「義明季賢討死事」では、義綱の次男美濃二郎義明の乳父である滝口季賢が登場する。「神変の勇士にて、後三年の戦ひに毎度手柄を顕し、際なき兵なりけるが」、「六十に余りたる老武者」である。季賢は義明を宿所に匿って討手と戦うものの、義明自害の報を聞いて、自らも切腹する。「義明季賢が武名。いとゞ高くぞ振るひける」と、この章段は締められる。役割を全うし討死した季賢は讃えられ、生きようとした義綱は批判される。『前太平記』の老武者に対する態度は一貫しているといえる。

このように、卷三十四以降、義家の時代になると立て続けに老武者が現れるようになる。これには、多くの老武者を配置することで作中時間の経過を示す意図があると考えられる。前節までに確認したように、老武者はそれぞれの時代を象徴する合戦に現れ、また、その際にかつての合戦について言及し、その経験を動機とする場合が多く、ここでも主に前九年の役について言及されている。『大鏡』の語り手が翁であるように、時代

を横断する老武者の語りが、前九年の役と、後三年の役や義綱追討とを結びつけているのである。すなわち、『前太平記』は単に老武者に関心を寄せているのではなく、時間の蓄積を表現することを意識して作品内に配置していると見做されるのである。

五、おわりに

『前太平記』が、いかなる意図で『太平記』の名を借りたのかは定かではないが、少なくともそれを意図した執筆態度を持っていたと見做すべきで、その点でいえば、『前太平記』は『太平記』以降に書かれた軍記物語、すなわち後期軍記に含まれるのであろう。しかし、中・近世問わず、軍記物語は戦争を中心としたある時代を記録するもので、少なからず戦に参加した当事者ないしその周囲の人間の視点が内容に影響を与えるものであるが、いうまでもなく『前太平記』は、成立の時代を遙かに遡る藤原摂関政治の時代をとりあげたもので、『今昔物語集』や『後三年記』といった既存の文学作品や歴史資料をもとに、過去の出来事を一つにまとめ上げたものに過ぎない。よって、合戦の仔細を記録として残す、あるいはそこで命を落とした者を物語ることと魂を鎮めるといった軍記物語が本来持つべき意図はなかったはずである。『前太平記』の執筆の意図を『太平記』や軍記物語の模倣であったと切り捨てるのは容易であるが、老武者、あるいは老いそのものに對する関心は、それまでの軍記物語にはない、『前太平記』自体が持つ特筆すべき点であると

いえる。

登場する老武者のほとんどが創作であることは、つまるところ他の記録には残らないような人物であるということの演出であり、そうした人物の視点から著名な歴史的事件をまなざすことが、『前太平記』の意図するところであったと考えられる。ここまで見てきたように、老武者が現れる話の構造はどれも似通っており、生きながらえることへの批判など、それを通して語られる思想も概ね共通している。すなわち、老武者個人の素性はそれほど重要でなく、老いは作中の時間を相対的な時間軸の中に位置づける記号であり、彼らが語る個人的な思惑はいずれも、歴史的事件の一部として全体に収束しているのである。『前太平記』は合戦の中の人物を描くことに重点を置いているのではなく、合戦を描く為に人物を利用するという姿勢を一貫しており、その意味では、個人の武勇や勲功、伝説に少なからず関心を寄せるおおよその中世軍記物語、または後期軍記・戦国軍記・軍書などと呼ばれる近世期の類似の構造を持つ作品とも異なる創作意識を持つ作品であると位置付けることができる。

注

(1) 以降、『前太平記』の本文は全て、板垣俊一校訂『叢書江戸文庫 前太平記(上)』(一九八九年 国書刊行会)及び同下巻の内閣文庫蔵無刊記四十一冊本に依る。板垣の解題は上巻に所収される。なお、引用部の傍線は全て私による。

(2) 「去年藤川合戦」は、巻三で将門が国香を攻めた藤代川の戦いが十一

月に起こったとされるため、それを指すと考えられる。卷五「節度使下向事」の道行に、「雪かともがふ鷺坂や、若紫の藤川より、紅葉ならねど赤坂や」と宿場町が続く部分があるが、そこで合戦があったという記述はなく関係性は不明。なお、『将門記』は将門が国香を攻めた年を承平五（九三五）年二月としており『前太平記』の設定と合わない。

(3) 本文は小林保治・増古和校注・訳『新編日本古典文学全集50 宇治拾遺物語』（一九九六年 小学館）に依る。

(4) 『叢書江戸文庫④ 月報十二 前太平記（下）』渡瀬茂「時間と文体の幻想」（一九八九年五月 国書刊行会）。

(5) 本文は野中哲照著『後三年記詳注』（二〇一五年 汲古書院）注釈篇の校訂本文「研究者用テキスト」に依る。

(6) 本文は林秀一著『新釈漢文大系47 戦国策 上』（一九九〇年 明治書院）に依り、読みやすさを考慮して引用文は通訳を用いた。

(7) 本文は延慶本平家物語注釈の会編『延慶本平家物語全注釈 第三末（巻七）』（二〇一三年 汲古書院）に依る。

(8) 本文は松林靖明・信太周・犬井善寿校注・訳『新編日本古典文学全集41 将門記 陸奥話記 保元物語 平治物語』（二〇〇二年 小学館）に依る。